異業種交流をどう活かす?

異業種交流グループ“プラザ21”

都産技研では、昭和59年から異業種交流グループの発足を支援し続け、現在、27グループ400企業が活動しています。昭和60年に発足し、今年で30周年を迎えた異業種交流グループ“プラザ21”の代表の方々に、お話を伺いました。

副代表幹事
株式会社マルコム 代表取締役
原田 学氏

代表幹事
特殊電装株式会社 会長
津屋 和夫氏

事務局長
国立大学法人電気通信大学
特任教授
竹内 利明氏

海外研修で深まった参加メンバー同士の信頼関係

維持・継続が難しい印象のある異業種交流会ですが、都産技研の支援から誕生した“プラザ21”は、今年で発足30周年を迎えました。継続の秘訣はどこにあるのでしょうか?

「まずは、何よりも会員同士の信頼関係を構築して、それを深めていったことが大きいと思います。これに最も役立ったのは、海外研修です。朝から晩まで一緒に行動するので、いやが上にも会員同士のコミュニケーションが深まり、相互理解が進みました。

また、組織づくりにもコツがあります。“プラザ21”では、弁護士や税理士などにも会員として参加していただき、実際にビジネスに役立つ人脈づくりを実現しました。さらに、共同研究契約を通じて、私の研究室のスタッフにも事務局の運営を手伝ってもらい、会員の負担を軽減しています」(竹内氏)

共同開発よりも、自社開発への“知恵”をもらうつもりで

お互いの絆が深まる中で、新たな共同開発商品も数々登場しました。しかし、共同開発よりも、もっと大切にすべきことがあると代表幹事の津屋氏は言います。

「我が社でも、高精密アルコール濃度計やホルマリンガス濃度計などの共同開発を行って成果を挙げました。しかし、共同開発の場合、開発資金の分担や責任の所在など、さまざまな問題が出てきます。ですから、共同開発よりも自社開発のための技術を補う“知恵”を授かるつもりで異業種交流会に参加してみると良いと思います」

異業種交流の価値に気付くかどうかは本人次第

「ビジネス環境が急速に変化している今、他社のやり方や考え方を知ることは、より重要になっていると感じています。先日も、某企業の工場見学に行ったのですが、それまで少量多品種製造は、オートメーション化には向かないと決めつけていた考えが一変しました。」(津屋氏)

「中小企業の経営者・技術者は、自ら進んで外へ出ていかないと既成概念を崩すことは難しいと思います。こうした異業種交流会での新たな出会いは、まさに必要不可欠なものです。そこにある価値に気付けるかどうかは本人次第なのではないでしょうか。」(原田氏)

メンバーの関係づくりに組織づくり、そして個々の参加メンバーの心がまえ。さまざまな要素が複合的に作用してこそ、今の“プラザ21”があるのです。

講演会レポート

講演会などの催しで、さらなる人脈づくり

6月、プラザ21異業種交流30年記念事業の第一弾として、講演会「日本の伝統文化を知る」が開催されました。2020年東京オリンピック・パラリンピックの開催を受け、自国の伝統文化を外国の方にも説明できるようにという意図から企画されたそうです。文化庁伝統文化課課長神代 浩氏が講師となり、メンバーの業種にとらわれないテーマに触れ、日頃出会う機会のない人々との交流が叶うことこそが異業種交流の醍醐味ではないでしょうか。

一般公開され、多くの人々が集まった講演会。日本の文化財について詳しく語られました。